

芭蕉と其角

今泉準一

『三冊子』に「蛇ひびくふと聞きば恐おそし雉き子の声」という芭蕉の句に対して

この句、師のいはく「うつくしき白かはにて雉き子の蹠けづ爪づめかな」といふは其角が句也。「蛇ひびくふ」といふは老吟也」と也。

(『校本芭蕉全集』)

とある一文がある。

この芭蕉の句は、『花摘』(其角編・元禄三年刊)には、

うつくしきかほかく雉子のけ爪

かな と申したれば

蛇くふときけばおそろし雉きの声 翁

と載り、またこの其角の句は、これより前に出版された『其袋』(嵐雪編・元禄三年刊)に載る。

同じく『三冊子』に

塩鯛の歯ぐきは寒し魚の棚（塩鯛）

を挙げて

「猿の歯白し峯の月」といふは其角也。「塩鯛の歯ぐき」は我老吟也。下を「魚の棚」とたゞ言たるも自句也

と芭蕉が語った、とある。これは元禄五年十二月三日付、意専宛芭蕉書簡に、

声かれて猿の歯白し峰の月 ぎ角

塩鯛の歯ぐきも寒し魚の棚 愚句

と並べて載っている。また、『句兄弟』（其角編・元禄七年刊）では、其角の句を兄とし、芭蕉の句を弟とし、

是こそ冬の月といふべきに山猿叫山月落と作りなせる物すごき巴峽の猿によせて峯の月とは申たるなり。（略）此句感

心のよしにて、塩鯛の歯のむき出たるも冷しくやおもひよせられけん（略）魚の店と置れたるに活語の妙をしれり（知）

（下略）

と述べている。

其角の『句兄弟』は周知のように、他人の作品を兄とし、これがきっかけで、それとは別箇の作品が成る場合、これは等類とならないのもちろん、また伝統の本歌取りとも異なる体の作品を弟として示した俳論書で、その最もよい例が其角の句の「声かれて」に対する「塩鯛の」の芭蕉の句となると述べたものである。

さて、ここで問題にしたいことは、この二つの例に見る『三冊子』における記載である。上述のように前者は元禄三年、後者は元禄五年のことと考えられるが、『三冊子』では、土芳に芭蕉が語った語として載せられてあるから、この芭蕉の言は恐らくはさらに後日のことと思われる。この二つの芭蕉の語は、其角の句と自分との相違を述べているが、『花摘』の芭蕉の句の前書、また『句兄弟』の其角の記載等によって知られるように、其角の句を否定するのではなく、其角の句は其角の

句として認め、これに対して自分の作風はこうなのだとその相違を土芳に説明しているものであることがわかる。

元禄三年九月十二日付、曾良宛芭蕉書簡に、

(上略) 其角は度々書状さし越、又人々の便にもさた承候。(中略) 其角『花摘』出版のよし、是は前々より段々委細に申聞かせ候。定而面白かるべくと待かね候。

とあるように、芭蕉は其角の『花摘』出版に期待し、さらに上述の句などを送っていてもいる。またこの書簡により、其角と芭蕉との間には、とくに其角からはいろいろと手紙で近況報告もあったようである。また『花摘』には、六月九日芭蕉からの来信の記事が書かれてあり、芭蕉の方からの書簡もあったことが知られる。

また、元禄三年十二月下旬の去来宛芭蕉書簡には、

(上略) 江戸より五つ物到来珍重。ゆづり葉感心ニ存候。乍去 当年ハ此もの方のミおそろしく存候処、しゐて肝はつぶし不申候へ共、其躰新敷候(中略) 彼義ハ只今天地俳諧にして万代不易に候(下略)

と、其角の「ゆづり葉や口にふくみて筆始」の句の「新しさ」を述べるなどのが見える。この二書簡を見ると、一層よく『三冊子』で土芳に語った「うつくしき白かく雫子のけ爪かな」の句はこれを否定しているのではなく、其角の作風として肯定し、これに対して私はまた私の作風があり、それが「蛇ふと」の句だの意で芭蕉が語っている事実が知られよう。

つぎに、元禄五年の其角、芭蕉の關係を見ると、元禄五年二月十八日付珍碩宛芭蕉書簡に、

(上略) 其角三ツ物京大津驚入候由、大慶に存候。(中略) 此地点取俳諧、家々町々に満(中略) 其中に独まぎれぬ物は其角斗ニ而候

と、点取り俳諧の蔓延に不満の芭蕉はこれに超然としている其角を称揚している。このことは同五年五月七日付去来宛芭蕉書簡においても述べている。ここにも其角の高評価が見られる。これらのことから見ると、『三冊子』に見る「声かれて」

「塩鯛の」両句においても同様の意味での芭蕉の発言と考えられよう。

二

芭蕉宛曾良書簡(元禄三年九月二十六日付)に、「『ひさご集』ノ事、かねて及承候。(中略)キ角などハ心に入不申候様ニ承候」とあり、元禄三年刊行の芭蕉の新風を示した『ひさご』に、其角は不満の意をもっていた旨を曾良が芭蕉に報じている。これは、その後の其角・芭蕉との往復書簡などで、其角の不満の真意が芭蕉にも納得が行ったのか、あるいは曾良から言われるまでもなく芭蕉には其角の不満の意がわかっていたのか、いずれにしても曾良の手紙によって芭蕉の其角に対する態度に結果としてまったく変化がなかったことが知られる。

つぎに元禄五年八月九日、許六が初めて芭蕉に逢い、芭蕉と其角とあまりに作風が異なるので、この疑問を芭蕉に尋ねたとき、芭蕉の風は「閑寂を好んで細し」、其角の風は「伊達を好んで細し」、この「細き所」が「符合ス」と芭蕉が述べたこととはあまりにもよく知られたことであるが、ここにも芭蕉の其角俳諧への許容を知ることができよう。

『菊の香』(元禄十年序)に去來の其角に送った書簡が載っている。この中に、去來が、其角の生前の芭蕉の作風を学び習おうとしない態度に対して不満をもち「猶、永く此にとまらば、我、角(其角)を以て劍の菜刀(劔)になりたりとせん」と述べたのに対し、「汝が言慎むべし。角や今我が今日の流行におくるゝとも、行末又そこばくの風流を吐出(はきだ)し来らんもしるべからず」と芭蕉は述べている。芭蕉没後芭蕉の新風に依然としてこれを習おうとしない其角へ去來が諫言を呈した書簡で、日付は元禄十年閏二月となっている。この書簡に上述の芭蕉去來問答は載る。其角はこの書簡の字句を変えて自編の俳諧撰集『末若葉』に載せたが、このことについてはとにかく、この芭蕉との問答が行れたものか不明であるが、中に『続猿蓑』の語があるのでこれ以降のことと考えられ、従って芭蕉晩年のことと思われる。ここにも同様の芭蕉の態度が感じ

とれる。もちろん弟子間の不和を思つての師の言とすることが第一に考えられなければならない。しかし上述の事情を考へるとき、それだけの言ではないことも十分に考えられるであろう。

しかし、一方『十論為弁抄』（享保十年、一七二五刊）では、

遺稿類説に、一とせ伊賀の西麓庵におはして、統猿蓑の撰集ありしに、武城の人くより発句をおくれり。其中に其角も三四章ありて、秋風辞を裁入たる句に「白雲に鳥の遠さよ飛は雁」といふを、我も人も感吟して、これらの手づまの及がたき事をいへば、故翁は例のほめながら、晋子が此ほどの俳諧をきけば玉振金声の作をもとめて、天下の人を驚さんとす。是より五年の変化をはからず、二作をかさねば平話を失ひ、三作をかさねば俳諧はつきて、其時は自己を失ふべしと。故翁は其年に遷化ありしが、（下略）

とある。この文にも『統猿蓑』の撰集の語があるので、元禄七年の九月上旬ごろのことかと思われるが（『校本芭蕉全集』年譜）、これには「例のほめながら」とあつて、「玉振金声の作をもとめて、天下の人を驚さんとす。是より五年の変化をはからず」云々と其角の作品を芭蕉が批判した言を述べている。

上述の『菊の香』に載る芭蕉の言にも、その前に去來の、「不易の句においては、頗る奇妙を振へり。流行の句にいたりては近來その赴を失へり」の言に對して、「汝が言しかり。しかれども凡天下に師たるものは、先己が形位を定めざれば、人おもむく処なし。是角が旧姿をあらためざる故にして、予が流行に誘ざる所なり。（中略）共に風雅の誠をしらば、暫く流行のおなじからざるも又相はげむの便なるべし」とある。これにさらに言を返して、去來が、劍の菜刀の言を述べたのに對し、芭蕉の「汝が言慎むべし」の言があつたと記されてある。

支考のいう「例のほめながら」は、『菊の香』に載る去來・芭蕉の問答のような芭蕉の言に對して、「例の」と言つたのであろうか。とすれば、支考の伝える芭蕉の言は、去來の場合と逆の關係になる。つまり、去來の言によれば、芭蕉は其角

の作風に対して芭蕉なりの批判はありながらも、肯定している。これに対して支考は、この肯定の部分を軽く「例の」ととり、批判の部分を強く打ち出した言とすることができるといふ。

去来は、其角の、芭蕉の作風との離脱に不満の意を持っていただけではなく、荷兮へも同様の不満を持っていた。これに対する芭蕉の答えは、元禄七年正月二十九日付、去来宛芭蕉書簡に

荷兮集之事日々御申越、其仕かた賤敷凡情を躰し候事、御とがめ尤に被_レ存候、され共平人の情、常之事に候へば、少_レも御とんぢやく被_レ成間敷候。万世に俳風の一道を建立之時に、何ぞ小節胸中に可_レ置哉。彼等に似合敷心指_(志)にて候。立廻るうちに古く成候て、既(に)三ツ物五年七年此方_(かた)一動の働_(はたらき)も見えず候

と述べている。荷兮の『曠野後集』(元禄六年十一月上旬序)の作風に対する去来の不満に対しての答えであるが、一見似たところもあるが、実質は其角の場合とかなりの相違を見せている。

三

さらにここで、元禄五年五月七日付、去来宛芭蕉書簡を挙げてみたい。これをみると、去来からの手紙の返事で、江戸の情況を詳しく報じ、また他門の俳人また弟子たちの誰彼に対して、その好悪の感情もかなり露骨に書かれてある。またこの書簡は元禄四年十月二十九日、支考を伴って、二年余を経て江戸に戻ってからの芭蕉の動向も知られて興味深いものがあるが、ここでは去来・其角・支考と芭蕉との関係を論ずるに必要な部分だけを挙げてみたい。

一、団水事、貴宅へ参候由、其_(ま)ままニ可_レ被_レ成候。定而是非之凡俗たるべく候

とあることでも知られるように、去来からの手紙に書かれてあったのであろう、西鶴系の北条団水がどんな用件があったのかはわからないが、去来宅を訪ねてきたのに対し、そのままにしておけ、と言っている。理由は、「是非之凡俗」の徒で

あろうから、というのである。ここでの是非は利害・得失の是非の意味かと思われるが、この一項は芭蕉の俳諧に対する態度はもちろん、また愛弟子去来への芭蕉の態度も知られる。困水に対する扱ひ方と同じことは江戸における点取俳諧の現状に対して

一、此方俳諧之体、屋敷町・裏屋・背戸屋・辻番・寺かたまで、点取はやり候。(中略)さてさて浅ましく成下り候。
中々新しミなど、かろミの詮儀(註)、おもひもよらず(下略)

と嘆じている点にも現れている。しかもさらにここでも前々節で述べた珍碩宛書簡と同様、「其中にも其角ハ不_レ紛居申候」と述べている。

さらに支考については次のように書いている。

盤子(支考)ハ二月初ニ奥州へ下候。いまだ帰不_レ申候。こいつハ役(役)ニ立_{タツ}やつニ而無_ニ御座候。其角を初連衆皆く_レ悪立候へバ無_ニ是非候。尤_もなげぶし何とやらをどりなどで、酒さへ吞_ハば馬鹿尽し候へバ、愚庵氣をつめ候事難_レ成候。定而帰候ハ、上り可_レ申、其元へ尋候も御覚悟ニ可_レ被_レ成と存候故、内語如此(に)御座候。史邦へもひそかに御伝、さたなき様ニ御覚悟可_レ被_レ成候。

とある。「役に立つやつに御座無く」の語がどのような意味でのものかは、解釈の分かれるところであろうが、去来へ「内語」と言い、「其元へ尋ね候も御覚悟」とか、「史邦へもひそかに御伝へ」とあるので、芭蕉自身も支考には、他の弟子と異なった印象があったように思われる。また「其角を初め連衆皆々悪み立て」とあり、芭蕉だけのものではなく、芭蕉も「是非なく候」(ここでは、自分だけがそう思うのではなく他の門人たちもそうなのでどうにもしようがないくらい意か)と言っている。芭蕉だけでなく江戸の同門の人々も同じ感想があったものなのであろう。とはいえ事実に見れているところでは、其角も奥州への旅立ち、また帰還の支考にそれぞれ挨拶の句を贈るなど平穩に交際しているし、また芭蕉も最後

となった伊賀から大阪への旅に支考を同伴しているなど、実際には上述の困水などのような意味のものではなかったことも知られるであろう。

この手紙によって知られることは、去来には心を許して自由にものを言っていること、また其角を決しておろそかにするところがないのみならずこれを高く評価していること、さらには芭蕉の態度は弟子によってその感情対応に相違があること、等である。

さて、『己が光』（元禄五年刊車庸編）に

翁つゝがなく霜月初はじめの日、

むさしのゝ、旧草にかへり申さ

る。めづらしくうれしく朝

暮敲戸の面くくに対して

都出て神も旅寝の日数哉

翁

住捨すみすし幻住庵にはいかなる

句をかのごされけん。それ

はそれ、さて世の中をうけ

たまはるに

妖ばながら狐食しき師走哉

其角

かくれけり師走の海カイツリの嶋

翁

と巻末にある（なお、このあとに「追加」として、車庸発句の四吟歌仙がある）。芭蕉の「都出て」の句の前書、またつぎ

の其角・芭蕉の唱和の句（であろう）の前書、ともにその書き振りから見て芭蕉が書いたとは考えられないのはもちろんまた編者車庸の添加とも考えられず、恐らく其角が書いて車庸に送ったのではないかと思われる。

芭蕉が深川の芭蕉庵の再興が成ってこれに移ったのが、五月中旬（『校本芭蕉全集』年譜）であるが、この前書では、「霜月初の日」江戸着、「旧草にかへる」とあるのでそのまま深川の芭蕉庵に入ったような書き方である。これは車庸に原稿を送ったときはすでに芭蕉庵に居住していたのでこのような書き方となったものか。其角・芭蕉の唱和の句は、ともに師走であるので、十二月のある日、其角が芭蕉を訪ねての吟であろう。

「住捨し幻住庵にはいかなる句をかのごされけん」は、元禄三年四月六日から同七月二十三日までの幻住庵居住ごろの芭蕉の作品を尋ねた体に書いて、あらためて上方滞在時代の芭蕉の俳諧活動を直接芭蕉に聞き、ついで「それはそれ」として、話題を転じ、「さて世の中をうけたまはるに」として、「妖ながら」の句を芭蕉に示した、ということであろうか。いろいろに解釈の生じるところであろうが、「世の中」は、江戸俳壇をさすか、あるいはさらに大きく、芭蕉の眼に映ずる自派他派の一切を含めての現俳諧世界か、またさらに大きくとって現社会全般か、とにかくこれを芭蕉に尋ね、其角がまず自分の世間観を詠み、ついで芭蕉のこれに対する感想としてのその世間観の一句を求めたということであろうか。

其角の句は、狐が化けてみても、狐は狐、内容は相変らずの貧しさだ、というのでいろいろ目先きを変えてみるだけのこととて、結局旧態依然で、今年も終わる、という意か。これに対して、そんな世間を相手にせず、忙しく跳び廻っている世間から離れた師走の湖のかいつぶりのように暮らす私ですよ、の意か。とすれば、上述の去来宛書簡の団水に「其ままニ可被成候」と言い、点取り俳諧流行に、「其中にも其角ハ不_レ紛居申候」とあるように、私もこのような世間を相手にせず、と唱和したことになろうか、いずれにしても、ここには何か二人だけで通じ合う世界があったのではないか。^②

元禄七年二月二十五日付、許六宛芭蕉書簡に、

一、愚門三ツ物京板にて御覽可^(被)候。江戸他家之事は評判無益と筆をとゞめ候。其角・嵐雪が^(義)蕉八年々古狸よろしく鞆打はやし候半。

とある。許六は晩年に得た有力な弟子の一人である。去来と同様、忠実に芭蕉の作風の吸収・消化に努めている芭蕉にとっては将来有望な蕉風展開者の一人である。許六の来信によって知ったものであろう、許六の歳旦吟を称したあとの一文である。「愚門三ツ物」とあるのは、其角・嵐雪らが出した歳旦帳をさすか。「江戸他門之事」とあるのは、蕉門以外の作家、調和・立志・不角ら、其角・嵐雪を除いた江戸の俳諧師で、これらは問題外、の意であろう。一般にはこのあとの「其角・嵐雪が儀」云々の一文は、芭蕉の真意に無理解で低俗化して行く姿を暗に皮肉った言と解釈されているようであるが、嵐雪のことはここではしばらくおくとしても、其角の場合は、以上に述べてきたところを見れば、かれらはかれらなりに、「古狸よろしく」やっているのであるから、これはこれとして読んでおいて、これらの作風に迷わされることなく御精進あれ、ぐらいの意にとつてよいのではないか。

また、元禄六年春中の日付のある不玉宛芭蕉書簡に

近年武府之風雅分々散々、適々^{たま}邪路の輩も相見え候……

とある一文も、しばしば其角嵐雪の作風またその俳諧活動をも含めて、「邪路の輩」と芭蕉が決めたように解せられて見解に出会うが、これにも同様のことが言えるのではないか。

一体、点取り俳諧の流行自体をどう評価するかの問題もあるが、このことはとにかくとして、嵐雪についていえば、このころから、禅への傾斜がようやく見えはじめ、嵐雪は嵐雪なりに、かれ自身の生活を歩みはじめている。すでに述べたように其角は其角として芭蕉はこれを認めている。これらをも含めて「邪路」とするとするならば、むしろ芭蕉の狭量が指摘せられねばならぬことになろう。一体、作家が自分の信ずるところを正しいとし、他を邪路とすることはしばしば見られるこ

とではあるが、深いまた鋭い批判力が裏付けられていなければ、それはひとりよがりというものであろう。この書簡でも「適々邪路の輩も相見え」とある。「たまたま」とあり、「も」とある。一切を「邪路の輩」と言っているのではない語気が感じとられるのではないか。この語気を顔面どおりにとってよいのではなからうか。もし、其角・嵐雪をも含めて言っているのであれば、この書簡もまた、その真意は前掲の許六宛書簡について述べたと同じように解すべきものではなからうか。

四

芭蕉は、元禄四年冬、江戸に戻ってより、二年半余、江戸在住時代が続ぎ、元禄七年の五月十一日、ふたたび江戸を發つて旅に出る。周知のようにこれが最後の旅となる。偶然のことではあろうが、其角はこのあと、九月六日江戸を發つて上方への旅に出る。そして大阪の客舎で病臥中の芭蕉に逢うことができ、その終焉に立ち会えたのである。蕉門最古参の門人として、葬儀その他一切を他の門人たちとともにすませ、悼文「芭蕉翁終焉記」をその位牌下において書く。その文中に、芭蕉の容態を叙して、そのあと、

(十月) 九日・十日はことにくるしげなるに、其角、和泉の府淡の輪といふわたりへまいりたるたよりを乙州に尋られるに、なつかしと思ひ出られたるにこそとてやがて文したゝめてむかひ参りし道たがひぬ。予は、岩翁・亀翁(同行者)ひとつ船にふけるの浦心よく詠めて塚にとまり、十一日の夕べ大坂に着て、何心なくおきなゆきねの行衛覚おぼん束なしとばかりに尋ければ、かくなやみおはすといふに、胸さはぎ、とくかけつけて、病床にうかゞひより、

云々とある。死目に逢えたのである。この文の最後に「幸にあへるは予也けり」と述べているように、まさにこれば其角の偶然の幸いであったといえよう。

ただ、この一文を読むと、其角が淡の輪のあたりに来ていたことを芭蕉が知っていたらしく思われ、そして弟子に代筆さ

せたのではあろうが、迎えの手紙を出し、これが行き違いになってしまったらしいことが知られる。これは、旅中もこのような気付便での書簡の往復があったのではないかという事実を思わせる。この文にあるように其角は淡の輪へ寄らず、ふける（深日）から船で北上したため行き違いになったが、大坂（阪）に着いて、その舟つき場で芭蕉の病氣を知ったようである。しかしこの文を見るとその前に、芭蕉が大坂に来ていることを知っていたような書き方であり、ここにも互いにある程度の互いの旅程が知られていたらしいことが知られる。また、「芭蕉翁終焉記」を読むと、ここに挙げた一文を見ただけでも知られるが、芭蕉と其角とは情の上でも深く結ばれていたことが知られよう。

其角が芭蕉に入門したのは、延宝二年ごろ遅く見ても延宝四年ごろ、其角十四・五・六歳と考えられ、芭蕉は三十一・二・三歳である。芭蕉が江戸へ下って、二・三・四年目ごろ、まだ俳壇上の注目を集めるには至っていない、その意味では無名の俳人であった芭蕉である。しかしこれが俳諧師其角の誕生を決定的にする。考えてみると、この入門時の最初の出会いもまた偶然と言えるかも知れない。一方は、十五歳前後の少年、一方は三十をちょっと出たまだまだ無名と言ってよい一俳人、しかもこれがきっかけで、その生き方には、上述のような相違はあれ、ともに俳諧に生き、俳諧に一生を終ることになる。以後二十年、芭蕉は漂泊型の詩人、其角は固着型の詩人、芭蕉とは正反対の性格の詩人である其角、俗な言い方をすれば出不精の其角がたまたま上方への旅、そして最後にまた、偶然の出会い、このことを思うと、ここに見えざる運命の糸のようなものさえ感じさせる。

其角は、葬儀万端をすませ江戸に戻り、芭蕉の百ヶ日には、桃隣・嵐雪らと追善歌仙、一周忌には、専吟・沾徳・紫紅ら一門の人々と追善歌仙、三回忌の追善俳諧は残っていないが、七回忌には追善俳諧集『三上吟』を出版、十三回忌には、思ひ出の一句を『五元集』に残している。また、折にふれて芭蕉に言及した句文がある。其角の一門の作家で赤穂浪士の吉良邸討入りの一人であることで、後に有名になる大高源吾、俳号子葉は『丁丑紀行』と題する俳文紀行を残しているが、その

中で義仲寺の芭蕉の墓を訪ねて

……面受口闕(缺)のわれにもあらねば、尊靈も却てとがめたまうべきやと、

こぼるゝをゆるさせ給へ萩の露

と記している。子葉は沾徳門、沾徳は後に其角系の俳人となる。其角一門の俳人たちは、芭蕉を知らない人たちが多い。文字どおり、「面受口訣」の俳人ではない。子葉を一例に引いたが、これらの芭蕉を知らぬ俳人たちが芭蕉に尊崇の念を寄せているのも其角の芭蕉への思い出の深さがそうさせている一面も見逃がせない。

芭蕉没後、蕉門の弟子たちは文字通り四分五裂する。この兆候はすでに芭蕉の生前に現れている。最もいい例は、去來の其角の作風に対する批判で、上述の『菊の香』に載る去來の其角宛書簡の中に見られる芭蕉・去來の間答である。以上に見てきたところでも知られるように、去來のきまじめな性格から見て、この言は信じられてよいのではないか。芭蕉は其角の作風に対して、これはこれとして認め、「相はげむの便」とさえ述べている。芭蕉は其角を認めていたのである。そして芭蕉没後三年目、去來は正直にこのことも述べて、その上での諫言を手紙にして其角に送ったのである。

一方、支考の『十論為弁抄』は、芭蕉没後三十一年目出版された書である。その間に記憶の薄れもある。例のほめながら」と一語で、芭蕉の言の其角作品の肯定部分を片付けているが、ここに去來に語った芭蕉の言の内容に近いことが語られたのではないか。あるいは前に挙げた許六宛芭蕉書簡に見られるように、其角の作風に迷わされないように、という意味で、一応は「ほめて」、しかしとむしろ同じく新進作家の支考への忠告の言として述べたのではないか。

生前における芭蕉は、感情の上で其角に不快感をもつようなことはなかったことはもちろん、その作風に対しても芭蕉は其角は其角として認め、ただ若い新進の作家に対して、その形だけの模倣に対しては批判的であったとするのが最も自然の解釈とすべきではなからうか。

芭蕉と其角との関係は、両者が情の上で深く結ばれていたことは、その言動から十分に立証することができると思う。しかし作風の上において、芭蕉が其角をどの程度に理解を示していたかについてはなお不明のところがある。しかし、他の弟子たちの誰よりも深く其角を理解していたことは事実であると思う。芭蕉の作品を通じてこのことは前著『五元集の研究』の「論述篇」において論じたが、今回は最近になって新しく発見された二書簡およびその他のことを加えて、別の側面からその一端を論じてみた。

注

- (1) これについては前著『五元集の研究』（桜楓社刊）において別角度からこの一文に見られる疑問点を論じておいた（七九四頁）。しかしここでは一応この文に見られる芭蕉の言を事実と見て論じて行くこととする。
- (2) 其角の句を自分をも含めての世の中にとると、其角の俳諧観が一層よく出てくる句であるが、この解釈のためにはそうとるに十分な傍証の呈示が必要とされるので、ここではこれには触れないことにする。